

# 更級への旅



## 嘆詠の宮司神奈志良佐の生きた明治



欧米諸国に並ぶ近代国家を目指して激動した日本の明治時代、当地に多大な貢献をした一人が佐良志奈神社宮司の豊城隆雄さんです（左の写真）。古来の姨捨山が冠着山であることを論証する「姨捨山所在考」をまとめるなど、初代村長の塚田小右衛門（雅丈）さんと協力して当地の新しい村の名前を更級村にするのに尽力し、更級小学校の先駆けの校長先生も勤めました（シリーズ14参照）。その豊雄さんが座敷の襖に書いた和歌と書が芝原地区の豊城隆雄さんのお宅に伝わっています。

### ▽里の春夏秋冬

中段左の写真をご覧ください。隆雄さんのお宅の座敷の襖です。隆雄さんのお話では、おじいさんの豊作さん（故人、襖写真の左上）が豊雄さんのところに和紙を持って行き、そこに書いてもらったものです。豊作さんは明治十一年（一八七九）、豊雄さんより三十七歳後の生まれです。親戚であり、幼少のころ豊雄さんから学問を教わって尊敬する豊雄さんに、ぜひお願いしたいと思ったと、隆雄さんはおっしゃっています。豊作さんのお名前の「豊」という字は豊雄さんからもったつたそうです。

豊雄さんの襖の書は全部で六枚あるのですが、写真の四枚は四季それぞれについて詠んだもので、白抜きのはくずし字をもとの漢字で表記したものです。我流に変体仮名を讀み解いた結果の歌が、左の短冊状に列挙したものです。

春は一番右の「見渡せば入り江の水うち解けて水うち解けて／鴨の浮き寝に春を知らるる」。現在の大正橋のたもと、上山田温泉入り口あたりが、水が溜まるところになっていたので、ここに集まって身を休めている鴨を見て詠んだものではないかと思えます。氷が解け、のんびり浮かんでいる鴨の姿を見ている

と、春が来たなあと思わずにはいられない、という感慨です。

右から二枚目の夏は「さじさせば川風涼しいままでの／暑さは船に乗り遅れけむ」。まだ、大正橋がない時代ですから、千曲川は舟で渡って行き来していました。「さじ」とは舟の櫂、櫂のことではないかと思えます。とても暑い夏だが、櫂を千曲川の水の流れにさして進み始めると、川風に体が包まれて、乗る前までの暑さがうそのようだという気持ちです。

秋の題材はやはり月です。「世事憂しと思ひ入りぬる山すみの／此方より照る秋の夜の月」。これも佐良志奈神社での夜、八王子山から顔を出した月のことです。世の中にはわずらわしいことがたくさんあつてつらいと思つて

## 豊城隆雄さん宅に伝わる襖の書

見わたせ婆以利え能古  
ほり打と計天鴨能  
宇起寝に春を知らる流

見わたせ婆以利え能古  
ほり打と計天鴨能  
宇起寝に春を知らる流

佐字させは河風す々し  
以未満天能阿つさは船二  
のりをくれ希む

佐字させは河風す々し  
以未満天能阿つさは船二  
のりをくれ希む

世字許しとたもひ  
より天累秋の夜の月

世字許しとたもひ  
より天累秋の夜の月

新年を字しみな賀  
らも古となく天春幾し  
古能身を祝ふ今日可南

新年を字しみな賀  
らも古となく天春幾し  
古能身を祝ふ今日可南



新年を慈しみながらもことなくて  
春来しこの身を祝ふ今日かな

見渡せば入り江の水うち解けて  
鴨の浮き寝に春を知らるる

さじさせば川風涼しいままでの  
あつさは舟に乗り遅れけむ

世事憂しと思ひ入りぬる山すみの  
此方より照る秋の夜の月

空を見上げたら、月がポツと現れた。この景色を見つけた豊雄さんの気持ちは和らぎ癒されたかもしれません。

四枚目の冬は「新年を慈しみながらもことなくて／春来しこの身を祝ふ今日かな」。敵かしい新年をまた、迎えてらるるに幸せだという感じですが、

### ▽鹿児島人も白をイメージ

ほかに床の間のとなりにある襖に二枚張つてあり、一つは「さきがけと雪もいとわす咲らめじ／ありと知らせて月のさゆらん」。早春、桜が咲いたときに雪が降つたのではないでしょう

か。雪をもなにもとせず、桜が春を知らせている。その上空では月が清らかに照つている。桜の花に月光があつて妖艶で幻想的な光景が出現しているのかもしれない。

もう一つの襖は部分的に破れたりして、文字がもとの位置からずれてしまひ、また読み解けていませんが、「国」「万代」という言葉があることから、豊雄さんが神主としての使命や役割を詠んだものではないかと想像できます。

以上、六枚の歌は、まず豊雄さんが神主としての気概を詠み、続いて早春から一年間のさらしなの里の情景を込めたものだと思います。つまり、隆雄さんのこの座敷には一年の四季が表現されているのです。

豊雄さんの歌と書には鹿児島の人も触発されました。約五十年前の昭和三十三年ごろ、隆雄さんのお父さんの安雄さんの弟さん、豊治さんの友人が鹿児島から訪ねてきて十日間ほど逗留した際、右の写真の書と歌を残しました。全四枚、世話になつた豊城安雄さんの漢字を一つずつ頭に置いて、芝原・若宮両地区を中心にさらしなの里を詠んだものです。

豊かなる更級の里山峽にりんご樹  
紅く西日に映ゆる  
城をなす上田の市を横切りて悠久  
の流れ千曲は流る

安らげき若宮の杜静もりて汽笛が  
走る雪白き夜  
雄々しくも冠着山の白樺の白きが  
ゆえに信濃を恋ふる

鹿児島の人にも「さらしな」という言葉の響きについて白、清らかさをイメージしていたことが分かります。隆雄さんの現在のお宅は昭和三十三年に新築され、現在の襖はそれ以降に張り直したものです。さらしなの里の宝物です。豊作さんの写真は、武水別神社（千曲市八幡地区）の大頭祭と呼ばれる新嘗祭で祭りを主催する氏子五人の中で、最上位になる三番頭をお勤めになったときのもので、豊雄さんの歌と書による襖の存在を教えてくださいましたのは、隆雄さんの親戚の豊城武久さんです。

発行 二〇〇九年 四月十九日

編集 さらしな堂

（代表・大谷善邦）

〒三八九・〇八一三

長野県千曲市大字若宮一八四・六  
（旧更級郡更級村）